

心暖まるランナー その2

ロンドン五輪の今年。みな厳しい冬季練習の真っ最中であろう。
そんな時こそ、心が揺さぶられる実話その2を。

(その1はコラム <http://www.kasuriku.net/nomo/112.html>)

1940年6月23日 アメリカテネシー州に一人の女の子が誕生した。
体重はわずかに2キロほど。未熟状態であった。

4歳の時に猩紅熱と肺炎の合併症にかかり、小児麻痺に。

左足は動かなくなっていた。

そのころの黒人スラム街の生活は貧困を究め、そのうえ彼女の家庭は22人兄弟の20番目という環境であった。

黒人貧困家庭を診察してくれる病院は近隣にない。

しかし母親と兄弟はその大事な妹の病気を治したかった。

片道80kmという遠方まで病院に通い、治療を続け家族中でその幼い妹を介抱した。食べるものも着るものも満足にない生活であったが、家族の思いは同じであった。

やがてその少女は8歳で補助器具をつけて動けるようになった。

みな愛情、期待に必死に応え、12歳で完治にたどりついたのである。



そして神様は少女に輝かしい才能を与えた。

家族の愛情に報いるため、彼女はそのたぐいまれな才能を必死に研鑽した。

まずはバスケットボールで州のチャンピオンに。そしてテネシー州立大学陸上コーチに認められ一気に才能は開花した。

1956年メルボルン五輪（16歳）	400mR 銅メダル
1960年ロンドン五輪（20歳）	100m（世界タイ記録）金メダル
	200m金メダル
	400mR金メダル

短距離3冠は黒人女性史上初。
最終400mRで勝った時には彼女は泣き崩れた。

「お母さん、家族のみんな、ありがとう！」

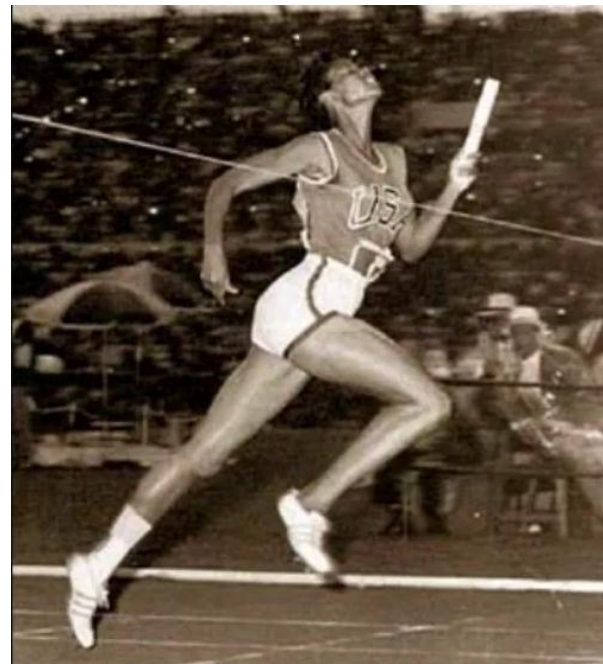
女性の名はウィルマ・ルドルフ。

アメリカ国民がいまだに模範として尊敬の念を絶やすことはない選手だ。

彼女は晩年、基金を設立し、貧困で苦しむ子供たちのために活躍した。

1994年、54歳の時、彼女は脳腫瘍で他界。

競技した期間はわずか16歳から6年間。
一瞬で眩い大輪の華を咲かせ、人々に尊敬され惜しまれながら散って行った。



ルドルフの言葉・・・

誰でも夢や希望、目標を持ちます。「どうせ出来やしない」と多くの人があきらめています。実行する前から頭で考えて躊躇しています。「私は出来る」と信じて、愚直に目標に突き進む人だけが、そこに到達するのだと思います。

また、

“No matter what accomplishments you make, somebody helps you.”

貴方がどのような業績を挙げたとしても、そこには必ず誰かの助けがあるのです。



筆 37回 野本